

第 37 回 安田女子大学・安田女子短期大学 エッセイコンクール

自由部門

優良賞「パワフルばあちゃん」

薬学部 薬学科 1 年 2 組 平有華

大学に進学するため生まれ育った島を離れる日、私は祖母の家に立ち寄った。祖母の住む家は、私の家から歩いてほんの数分のところにある。「ばあちゃん、これから広島行ってくるね。」そう言って挨拶し帰ろうとしたとき、祖母が握手を求めてきた。差し出した手を握る力は、痛いほど強い。思わず、「痛い、痛い、痛い」と声をあげてしまったほどだ。どこからこんな力が出るんだろう。もう 90 歳を超えた人の握力ではない、と少しびりながら祖母の顔を見る。「大学でも頑張りなさいね、あなたなら、大丈夫。」そう言って柔らかく笑う顔とは対照的に、手からは祖母からのエネルギーがビリビリと伝わる。ばあちゃんには負けられない、と私も強く握り返す。まだまだだね、全然痛くないよ、と言って祖母は笑っていた。

祖母は、私が最も尊敬する人だ。祖母を一言で表すとしたら、とにかくアクティブ。何事も行動せずにはいられないという、なかなか行動に移せない私とは正反対のタイプだ。

祖母は、祖母の時代には珍しいバリバリのキャリアウーマンで、現役時代は仕事で駆けずり回っていたらしい。母は、「私が高校生の時は手作り弁当なんてあまりなくて、おばあちゃん仕事ばかりしてたのよ。」と文句を言いつつも少し誇らしそうだ。また、仕事をするだけでなく、子供の PTA や町内会の会長も務めてきたらしい。

今は老人会の会長も引退しているためゆっくり過ごせそうなものだが、これがまた毎日忙しいのだ。町内会が開催する体操に参加したり、老人会でダンスや歌を練習してイベントで発表したり、友達とカラオケに行ったり、通っている病院で知り合った人と仲良くなってやったこともない日本舞踊を習い始めたり。

いろいろなことに挑戦したり、人との繋がりを大切にしたりして毎日を過ごしている祖母の姿は生き生きとしていて、私も見習いたいな、と思う。

このようにアクティブな反面、折り紙や編み物、習字なども得意としている。小さい頃から、妹の世話で忙しい母の代わりに一緒に過ごすことが多かった私は、いろいろなことを教えてもらった。例えば、夏休みや冬休みなどの長期休みに学校から習字の課題が出るときには、毎回練習に付き合ってもらっていた。祖母に鍛えられたからだろう、大学の硬筆講座ではいつも褒められる。祖母は、毎年 100 人くらいの知り合いに筆ペンで宛名からすべて手書きの年賀状を送っている。昔からずっと続けているらしい。恐ろしいほどの集中力と根気を持ち合わせていて、すごいと思う。

祖母が経験した戦争の話聞くまで、私は、祖母は私が今見ている祖母のように毎日明るく前向きに過ごしてきたのだと思っていた。しかし、ある夏に聞いた祖母が経験した戦

争の話は、想像を絶するものだった。

子供のころ、満州に住んでいた祖母は、戦争が始まってからずっとおびえて生活していたそうだ。祖母が言うには父親は“偉い人”だったため、いつ家が襲われてもおかしくない状況にあった。父親からは、もし自分が捕まるようなことがあれば、ここに置いてある銃でお前たちを撃って自分も死ぬ、と言われていたらしい。自分や家族はいつ死ぬのか、今日か、明日か。そのような極限の状態で毎日を生きていた。最終的に、子供たちだけ先に日本に避難したが、父親は殺されてしまったそうだ。この話をしたとき、祖母の目はとても遠くを見ていた。いつもの活気のある祖母はどこにもいなくて、別人のようだった。私は、話を聞き終えても何も話せなかった。こみあげてくるものを抑えるのに必死だった。過去にテレビで戦争の話を聞くことは何度もあったが、自分の身近な人の口から、実際に経験したこととして聞くのはショックが大きかった。

しばらく日数が経ってから、なんでそんなに辛い経験をしたのに立ち直って明るく元気に暮らせているのか聞いてみたことがある。いろんな人と関わって、支えてもらったおかげだ、と祖母は言った。その時の祖母は、とても穏やかな表情をしていた。人との繋がりは大事にしろ、人は助け合って生きていくものだから。祖母の言葉には説得力があった。自分が辛いときは人をたくさん頼っていいし、その分ほかの人が辛いときは助けよう、それが生きるということだ、と祖母から学んだ。

大学進学前に握手をしたとき、なぜか祖母の話が頭をよぎった。私が握っている手は、しわだらけで、しみがあって、血管が浮き出ている。そして、びっくりするほど力が強い。でも、ただ強いだけではなく、生きるエネルギーに満ちている。新しい環境に飛び込むのに少し不安を感じていた私は、祖母からものすごいパワーをもらった気がした。